

## 「改革狂」の潰えた夢——フランス革命期のレチフ

小 澤 晃

- I はじめに
- II 秩序／父権／王政
- III 王 殺 し
- IV 共和主義へ、そして……

### I はじめに

ミシェル・ヴォヴェルの『フランス革命の心性』<sup>1)</sup>が一つの好例となっているように、近年、フランス革命を集合心性の観点から理解しようとする研究が行われ始めている。その際歴史家が資料として、文学的なバイアスに注意を促しながらも好んで引用する作家の一人にレチフ・ド・ラ・ブルトヌがある。レチフは、独学者ながら、18世紀のれっきとした思想的著作家として、革命の進展に真摯な眼差しを向け続け、様々な事件の生々しい報告や、それらに関する自己の見解を各種の著作に残している。しかし彼は革命の激動の中では、単に一庶民として、権力とは一切関りのない場所で生きた印刷作家にすぎない。歴史家たちが、革命を扱ったレチフの著作に関心を寄せる理由はまさに、こうした彼の下からの眼差しにあると言える。

民衆は、革命の中である時は主役となりある時は脇役となりながらも、結局は激流に翻弄されていくマスであり、畢竟レチフもその一員にすぎなかった。ところが、レチフが革命について書き残した多くの文章は、大方の予想を裏切って、必ずしもその民衆の代弁として書かれたものではない。それは、他の誰でもなく、レチフ自身の希望と幻滅と絶望を率直に表明したものであり、歴史的資料である前に、なによりもまず文学テキストとして扱われねばならない性質のものである。もちろん報告された事柄の中には多くの歴史的事実が含まれて

いるが、それらは概ねレチフ自身の内面世界の色合いに染められている。

革命は、彼がそれまでに育んできた人間と社会に関する改革プラン、とりわけその集大成としての『アンドログラフ』(*L'Andrographie*) を、にわかに実現の可能性のあるものと意識させた。権力者に対する彼の期待は大きく膨らんだ。しかし期待に始まったその楽観的な革命観は、いつ果てるともなく展開される荒々しい状況への戦き、日々増大する人間性そのものへの疑念、そして、旧来の社会体制が完全に崩壊した挙句、恐るべきアナキーに陥るのではないかという恐怖によって、絶えず大きく動揺する。

初めレチフは革命に強い共感を抱き、その進展に大いに期待した。しかし眼前に展開される革命の容赦のない現実、彼を瞬く間に落胆させ、打ちのめし、絶望させる。民衆の野蛮性、獣性、暴力性とレチフの眼に映じるものは、彼の予想をはるかに越えて暴虐の限りを尽くす。剥き出しの暴力が露骨に増殖していき、人間性に対する深い絶望をもたらす。こうした現実が予見させるアナキーな状況の到来は、「秩序主義者」レチフが怖気を震うに充分だった。

レチフの理想とした政治体制は、この時代の間層において一般に肯定的に評価され支持された立憲君主制だった。レチフは立憲君主制を背景にした緩やかな社会変革が進行することを想定し、またそうした変革のプログラムに、自分が長い時間をかけて育み、次々と世に問うてきたプランが採用されることを期待していた。しかし現実には展開したことはことごとく彼の期待を裏切った。彼が敬愛をこめてその君臨を想定した「君主」は、あろうことか、逃亡という裏切り行為によって、立憲君主制という彼の甘い期待を粉碎した。

革命に対するこの期待の大きさと、それに正比例して激しかった幻滅とが、晩年のレチフを、現実の変革よりは自己の夢想の世界に沈潜する方向へ導くことになる。

本稿は、革命の激しい展開の中でレチフの取った政治上の態度、そのレチフ一流の「哲学的」理由、希望と幻滅、そして、立憲君主政から共和主義への信条の変化を、『パリの夜』を中心とした諸作品に探るものである。

## II 秩序／父権／王政

民衆の中から立った文筆家レチフは、社会上層の人々や知識人たちと親交があったものの、フランス革命の全期間を通して、一介の印刷作家として生きた。従って、彼の革命に関する報告、証言はすべて、いわゆる革命的権力闘争とは無関係な場において行われたものである。レチフはいくつもの独自のユートピア的社會改革論の著者ではあっても、現実政治の場においてそれを実現する権能も実践的意思も持ってはいなかった。彼はひたすら好ましい政治的指導者が現れ、自分の改革案を評価し、採用して、社會を緩やかに着実に變革してくれることを期待した。その期待が向けられたのは、初めは立憲君主であり、君主の廢絶後は共和主義的エリートだった。しかし彼の共和主義的姿勢は「恐怖政治」の頃から、次第にある種の不透明さを帯びることになる。

初めにレチフの革命前後の社會觀、政治觀をかつつまんで整理しておこう。彼は『テスマグラフ』(*Le Thesmographe*)の中の「1789年7月30日印刷」という注を付した一節で、きわめて簡明かつ率直に自分の政治的信条をこう述べている。

私はいささかも奴隸制や専制政治を支持するものではない。私が良き愛國者であることは証明済みだ。しかし私は國王を愛するし、王國三部會を構成する開明的で細心で公共利益の味方である構成員の方々が行う賢明な改革には拍手喝采するものである。私は秩序と平和と正義を愛する。それらを傷つけるかもしれないものを全てを唾棄する。そして法の維持のためなら、私の血の最後の一滴まで捧げるだろう。( *Le Thesmographe*, p. 367.)<sup>2)</sup>

ここで述べられていることが、三部會の機能の革新と充実に期待するものであることは明らかであるが、それを支えている思想は、一般に革命期の中間層を特徴づける温和な改革路線である。しかしこの一見平凡な政治信条の表明としか見えない文言は、一般的政治姿勢の文脈ではなく、レチフ的文脈において把握されなければその真の意味は明らかにならない。

端的に言えば、その信条とは、秩序志向と父権主義と穩健主義を特徴とする

ものであり、一種の保守的自由主義と評しうるものかもしれない。しかし、仮に今日我々が同じ語彙によって類似の概念を表明することがあるにしても、我々の理解するものとレチフの思考との間には、世界と宇宙の成立に関する観念において根本的な不一致がある。

レチフにおける秩序への志向はきわめて強固である。それは決して、単に現状を追認しその保全のみを追及する一つの政治的立場などではなく、彼の自然観から必然的に導き出される宇宙原理の一つなのである。

別の一文で論じたことだが<sup>3)</sup>、ここでレチフの「自然観」を簡略に見ておこう。

彼の自然学の根本観念によれば、宇宙はその存在の第一原理である「物質的な神的中心」と、そこから発生する無数の「知的太陽」の階層構造によって成立し、その無限の生成と消滅の運動、すなわちレチフが転回 (*révolution*) と呼ぶダイナミズムによって、常に蘇り続けるものとされる。これは、唯物論的生気論とでも呼んで差し支えないレチフ独特の宇宙観である。この「神的中心」こそ、宇宙が物質の盲目的運動に陥らないための必須の観念としてレチフが拮定したものであり、無数の知的太陽とその子供が作り出す多元同心構造を秩序付けるものにほかならない。

彼にとって自然とは、機械論的かつ静的な均質空間ではなく、それを構成する物質相互の「質的差異」によって力動的に成立する階層的な空間である。それゆえ、その差異の総体としての自然は、その安定のためには必ずや「秩序」を志向するものであり、その反対のベクトルをもつあらゆるものは宇宙と自然に反するもの、すなわち悪とされる。

機械論的自然観／宇宙観が無意識のうちに我々を支配している近代・現代からは想像しにくいことであるが、18世紀にはこうした自然観は近代的な宇宙観と優に拮抗するだけの力を保持していた。こうした自然観／宇宙観が、人間社会の構造にアナログカルに投影された時、そこに現れるものが、統治の原理としての秩序志向と父権性であることは容易に見て取れよう。

『パリの夜』 (*Les Nuits de Paris*) の多くの箇所が語っているように、すでに

革命の前夜から、無秩序、アナキーへの不安が存在した。とりわけ下層民の盲目的な暴力性はレチフの恐怖を煽った。粗暴な子供たちが社会の掟を無視し、老人をいたぶる様を目撃すれば、レチフは来たるべき時代に暗澹とせざるをえない。彼は「第371夜」(*Les Nuits de Paris*, pp. 3180-3188) でこれをルソーの悪影響だとし、「こういう世代を作り出したのは『エミール』だ」と断言している。レチフのこの断定の根底には、ルソーの『エミール』の主張が、社会において安易かつ過剰に適用されることを恐れながら書いた批判の書、『父親学校』(*L'École des Pères*) の思想があるだろう。レチフにとって下層民とは、秩序と自己を調和させるべく教育によって社会的に訓練されていない者の謂であるから、彼が社会階級としての下層民を蔑視したという非難は当たらない。レチフが恐れたのは、この無教育な下層民の粗暴な性向が次第に民衆全体の風儀となって社会を脅かし、ひいては社会の無秩序化をもたらすのではないかということだった。

『パリの夜』の第二部（「夜の週日」*La Semaine Nocturne*）「第382夜」（1789年7月12日）、「第383夜」（同7月13日）、「第384夜」（同7月14日）(*Les Nuits de Paris*, XV, pp. 32-90.) には都市の下層民に対するレチフの恐怖と嫌悪が激しい言葉で表明されている。7月12日、チュイルリー庭園で起こった民衆と軍隊との小競合でランベスク将軍が老人を虐殺した事件は、確かに言い訳のしようのない蛮行だった。しかし、それに対する憤激から生じた下層民の反応が盲目的な暴動と化していったことのほうが、レチフにとってははるかに不安で恐怖を覚えさせる事件だった。実際、あの7月14日に起こった一連の血なまぐさい出来事は、すでに社会の各所で醸成されていたこうした荒々しい雰囲気の当然の帰結だった。バスチーユ襲撃、串刺しにされた監獄長官ドロネーの首、血に飢え悪鬼のように罵り叫びいたぶる少年たち、首を切られた死体が浮かぶグレーブ広場の川岸、屠刀の先にぶら下げられた犠牲者の内臓、街灯に吊るされた死体の数々、後に語り継がれていくこうしたおぞましい光景は、粗暴な下層民あるいは賤民に対してばかりではなく、人間性一般に対してペシミスティックな結論を抱くに充分すぎるほどのものだった。「破壊靈がパリの街の上をさまよっ

ていた」とレチフは恐怖に戦きながら書き記す。

確かに、レチフが民衆に対して過酷な判断を下したことは事実である。実際、彼の民衆観に歯切れの悪い批判と弁護を展開する論もないわけではない<sup>4)</sup>。しかし、レチフの民衆蔑視なるものは主として都市の下層民・賤民に向けられたものだった。アンシヤン・レジームの都市の悪と、それが人間性に与える影響をルソーとともに説いてやまなかったレチフにしてみれば、この判断は根拠のないものではなかった。都市の下層民に対する態度とは対照的に、彼の出自である農村の、昔ながらのしきたりと秩序を保ちながら族長時代風バトリアルカルに暮らす人々や、実直な都市の手工業者などに対する彼の眼差しは温かい。しかし、革命の荒々しい展開の中で、万が一「粗暴な民衆」に権力の基盤を置く勢力が支配を確立することにでもなれば、社会は否応もなく無秩序へと向かって崩壊していくだろうという不安な予感だけが、レチフの心を捉えて離さなかった。そしてその予感は後に現実のものとなった。

秩序への志向と並んでレチフの精神世界を刻印するものは父権主義である。このイデオロギーは政治の力学としては必然的に、国父たる王という観念を導入する。これは、キリスト教的な神の観念に由来する父権主義と一見同一のもののようにも思われる。しかし、そうしたイデオロギー的類似は結果としての符合であって、レチフにおいては事態は逆である。レチフの父権主義を観念の次元で支えているのは、キリスト教的な神の観念ではなく、前述した彼の宇宙観における「神的中心」、すなわち全ての秩序の源としての抽象化された「父性」なのである。かくのごとくイデオロギー化された父性と父権主義はまことにレチフ的なものであり、革命のある段階までの彼の政治的願望・情熱・幻滅を特徴づけるものである。

絶対王政のイデオロギーである父なる王という観念は、宇宙の根本原理としての父というレチフ独特の観念と奇妙にも符合してしまう。レチフにとって、キリスト教の人格神とは異なるこの「父」の観念こそ、宇宙および社会の全てを統一し、秩序づける唯一の観念なのである。実際レチフの著作には、『父親学校』

*L'École des Pères* (1776年), 『父の生涯』 *La Vie de mon père* (1778年), 『父の呪い』 *La Malédiction paternelle* (1779年) など、タイトルに直接「父」を冠した作品が多く見られる。レチフがこれほどに父なる王、国父という観念にこだわったのは、彼の宇宙観、自然観、人間観そのものが「オス」原理に基づくものにはかならないからである。すなわち、レチフのメタファ溢れる生殖的宇宙観の中では、生命そのものである宇宙の神的エネルギーを受託して下位に分有させていくのは常に、存在の知の部分であるオス原理であり、存在の物質部分でしかないメス原理は、その受け渡しを「交接」によって補佐するだけだからである<sup>5)</sup>。

ところで、父権主義イデオロギーを一般的に特徴づけるものは、権威への個の服従による全体秩序の尊重である。従ってここでは近代的な自由や、個の尊重や、人権などの観念は必ずしも重要なものとは見なされない。というより、父権主義とは、そうした近代を刻印する諸観念とはおよそ無縁の志向において成立しているイデオロギーなのである。仮に、近代の個の尊重に基づく平等主義的社会が、近代において確立した機械論的・均質的宇宙にその観念の基礎を暗黙のうちに置いているのだとすれば、父権主義に基づく秩序志向的階層社会は、生氣論的・躍動的宇宙に深く根差しているものなのかもしれない。そこにおいては、個は秩序の中に能動的に埋没するのである。もちろんこれは、近代において是認される類のイデオロギーではないし、またアメリカ独立革命やフランス革命を領導し後に近代の原理として一般的に確立されていく諸々の価値観に完全に相反するイデオロギーである。しかし、レチフの思考法がこうした「非近代的な」価値観に基づいていることは無視されてはならないことである。

革命は日々暴力化していった。それによって日々現実化していく無秩序への恐怖は、レチフをほとんど折るような思いへと駆り立て、彼を反革命の立場に立ついわゆる王政主義者とはまったく異なった意味での王政主義者に仕立て上げた。

革命勃発直前のパリを長期にわたって描写した『パリの夜』(第一部)<sup>6)</sup>の末尾

に付された「あとがき」(Postscript)は、ジュネーヴから再び国権の中枢に呼び戻されたネッケルと、再開された議会とに歓喜した民衆が、浮かれ騒ぎのあまりあつというまに手の付けられない暴徒と化していく様子を報告している。「この浮かれ騒ぎに初めはなんの規制もなかったのだが、若者や下層民や生まれながらの騒動好きな連中のせいで、浮かれ騒ぎがやりたい放題の騒乱へ変質し」(*Les Nuits de Paris*, pp. 3355-3358.)、「まっとうな」中間市民に極度の緊張と不安を与えるまでに至る。こうした都市下層民の騒擾行為を巧妙に組織化して政治的運動に仕立て上げていくのはまさに、後にロベスピエールが得意としたところだった。周知のごとく、革命の進展につれてそうした煽動は頻繁化していく。しかし、全てに優先して秩序を志向する父権主義的王政主義者レチフには、こうしたこと全てが到底容認しがたいものだった。彼は自分の信条に従って、こう民衆に呼びかける。

市民諸君！政府に敬意を払おう！歯向かうのはやめよう！法律を遵守しよう！法律が公布されたらすぐに従おう！法律の元である君主を、それを実施する法官たちを、人物の良し悪しはとりあえず考慮せず、敬おうではないか！無秩序は世界のあらゆる国において最大の悪だ。自分の家族の中で無秩序を我慢しようと思う者があるだろうか？市民法は父権の拠り所だ。使用人に対する主人や職人に対する親方の権威の拠り所だ。そして法官たちは法の執行者、祭司であり、下賤の輩が攻撃するあの衛兵たちは法官の道具なのだ。(中略)政府に由来するものに下賤なものは何一つなく、その全ては偉大にして高貴である。その聖なる権威は、父権に似て、学問と芸術に必要な落ち着きと安らぎを国家という大家族に与える。( *Les Nuits de Paris*, pp. 3358-3359)

この君主政への素朴かつ古めかしい信頼こそレチフを特徴づけるものである。ここには啓蒙的18世紀の思想界をリードした平等主義的民主主義的観念のかけらもない。しかし、そもそもレチフは、政治体制としての民主政は民衆にとっては能力に余る制度だと考えていたのだから、その態度は一貫している。現実の革命とはそもそも、来たるべき政治体制をめぐる新旧左右勢力の主導権争いにはかならないから、彼の信条が素朴かつ古めかしいという理由だけで、必ずしもそれを否定的に評価することはできまい。

革命勃発数日前からの出来事を追った『パリの夜』第二部、別名『夜の週日』には、血なまぐさい殺戮や暴力の報告と並んで、時にはレチフを昂揚させる好ましい出来事の報告も混じっている。「不安のさなかにも歓喜の日はあるものだ！」(Les Nuits de Paris, XV, p. 90.) それは7月17日のルイ十六世のパリ訪問であり、また10月5日、6日に展開されたパリの女たちのヴェルサイユ行進と、その結果実現した国王のパリ再訪問だった。ルイ十四世以来宮廷が置かれていたヴェルサイユから、わざわざ君主がパリを訪問するということは、王権による革命の認知と許しであり、革命の勝利の証しだった。それによって状況は暴力から友愛へと展開し、国民は一体となるはずだった。

私はここで言うておく。近衛兵の振舞いに皆が心を打たれたということを。近衛兵たちは帽子に国民帽章を付け、民衆と一緒にあって、「国王万歳！国民万歳！」と叫んだ。実際この二つは同じ叫びなのだ。王は頭<sup>あたま</sup>であり、国民は胴体であり、この二つは一体のものだからである。実のところ王は、三部会の開催中は、国民に国民が望む法律を作らせておくのである。王は自分が国家の代表者だと承知している。王は国民の代表たちに自分の地位を譲っておくのである。そしてひとたび法律ができれば、その地位を取り戻す。それを実施するには頭は一つしか必要ないからである。(Les Nuits de Paris, XV, pp. 153-154.)

革命勃発後4カ月、レチフは早や革命の終息を確信し、確かな社会改革に国王がその本来の権力を発揮してくれることを無邪気に期待した。これはレチフばかりではなく、他の多くの「まっとうな」市民階級に共通の感覚だった。しかし、そのあまりにも理念化され理想化された国王像は、逆にそれが裏切られた時には激しい落胆と憎悪をもたらすことになるだろう。

### Ⅲ 王 殺 し

周知のごとく、フランス革命は、その勃発の初期からある種の終息の段階に至るまで、幾多の忌むべき事件や陰謀や反動を含みながら、激しくうねりつつ展開していった。レチフがそうしたうねりに即しながら書き残した多くの著作の中には、時期によって人物や事件に対する評価の矛盾が散見される。とりわ

けマラーやジロンド派への評価が、ある時は賞賛と共感、ある時は非難と否定というように、時期によって大きく矛盾していることは知られている。これをもってレチフの不誠実、日和見主義と言うのは物事を一面的にしか見ないもの、という誹りを免れないだろう。今日のリーダーは翌日のギロチンの露であり、きのうの傍流が今日の正統となるといった具合に、激変に激変を重ねていく政治的社会的状況の中で、政治家や革命家ならざる一介の印刷作家が、気楽に自作の中に率直な見解を述べることなどはとうてい不可能な時代だった。デカルトもそうであったように、困難な時代を生きる者には仮面が必要なのである。レチフの革命に対する態度の変転を単純に日和見主義の結果とするのではなく、自らの信条と状況との矛盾をやり過ごすためにとりあえず選択された態度の結果とするのが妥当であり、レチフ自身は思想的に一貫していたと見るほうが正しいだろう<sup>7)</sup>。

レチフの革命に対する反応の推移を辿ることはそう難しいことではない。

まず、初期の単純な喜びと歓迎と熱狂があった。革命が勃発して約一年の後の1790年夏頃、すなわち革命一周年を記念して挙行された「連盟祭」*la Fête de la Fédération*の頃までは、レチフは革命政府、特に立憲議会が次々と実行していった改革に喝采を叫んでいた。とりわけ「旧体制」下の憎むべき諸制度の廃止は、レチフ自身が従来から著作において主張していたことの現実化であったから、その喜びと更なる期待は大きかった。不十分とは言え「人権宣言」において実現された社会的平等、王の封印状の廃止、貴族制度の廃止、教会と僧侶階級の改革、婚姻の世俗化、離婚の承認、世俗暦（革命歴）の採用等々、どの改革をとっても革命がもたらした新たな時代の恵みを実感させ、もはや決してあの暗黒のアンシヤン・レジームに戻りすることはないのだという深い安心感を与えるものだった。就中、立憲議会（1789年11月～1791年9月）に対するレチフの信頼は大きかった。なによりもそれを指導する立場の人々の穏健性、理性的態度、理想主義は心からの信頼を寄せるに値するとレチフには思われた。立憲議会は「数世紀はかかるような改革を二年で成し遂げた」（*Les Posthumes*,

Lettre 357, tome 4, p. 271.) ののである。そして更にレチフは、立憲議会在が築いた着実な基礎の上で改革が緩やかにかつ着実に進行していき、その最高の達成として、立憲君主政が成立することを願っていた。絶対権力をほしいままにする旧来の暴君ではなく、国民の統合の要として国民に愛され、しかも自らを一人の市民と規定する立憲君主を国民の上に戴く日の到来は、レチフが心から期待してやまないものだった。レチフは『パリの夜』第三部において、連盟祭についてこう書いている。

(略) 私はすぐに起きて、連盟祭を見に出かけた。シャン・ド・マルスを通り抜けて行った。様々な軍団と国民議会団がやって来た。そして遂に国王が到着するのを見た。王の人生でこの日は最後の良き日だった。王は丈高く見えた。満足しているのだと思った。実際満足していたのだと今も思う。しかし王を取り巻く者たちが満足であるはずはなかったのだ,, 私は王が憲法に誓いを立てるのを見た。それは美しい行為であり、罪だった,, (略) 国民に誓う国王はその誓いを守らねばならない,, (略) 私は感動し、胸に迫るものがあった。あの不幸なルイもそうだったと私は思う。(略) この偉大な一日は瞬刻間に終わった。それは革命におけるもっとも美しい一日だった。ラファイエットは全幅の栄光に包まれていた。しかしその一日はまるで夢のように過ぎて消えた。(Les Nuits de Paris, XVI, pp. 277-278.)

事実、連盟祭を頂点にして革命の麗しい第一段階は終わりを告げ、状況は次第に暴力と恐怖の季節へ踏み込んで行く。

こうした激動の日々の中でレチフにもっとも激しい衝撃と無念の怒りを与えたのは、国王の裏切り、すなわち世に名高い「ヴァレンヌ逃亡」事件である。91年6月に起こったこの事件こそ、反革命の策動が着々と進んでいることを白日の下に曝した事件だった。国王が、国民を裏切り、外国勢力と結託し、結局は傀儡王として帰還する以外に展望のない、この無謀にして不実な企ては、実はすでに同年2月の段階から練られていた計画だった。この事件の萌芽の時期から、ヴァレンヌ逃亡事件を経て、パリ連れ戻しまでの経緯を、レチフは『パリの夜』第三部「パリの二十夜」(Vingt Nuits de Paris) の中で描いている。レチフにとってそれは、革命の望ましい完成態として切望した立憲君主政が、目の前で音を立てて崩壊していくことを意味するものだった。

レチフはこう憤激する。「ルイ十六世は、旧貴族や妻や妹や叔母たちに悩まされた拳げ句、またおそらく己の絶対権力が弱まったのを見る無念さから、パリを去ってフランスの近隣諸国の腕に飛び込こむことを考えていた。彼らの武力の助けを借りて、己の領土に勝利者として帰還しようとしていたのだ。(中略)彼にとって、自分を救い、自分とともに全ての者を救う唯一の手段は一つしかない。それは憲法にしっかりとしがみつ়くことである、救いの大錨にしがみつ়くように。」(*Les Nuits de Paris*, XVI, pp. 281-284.)

一回目の企ては、土壇場になってルイが実行の延期を決定したために、未遂に終わった。二度目は、サン・クルー行きを利用して逃亡を謀ろうとした4月半ばの事件だったが、これは民衆の阻止で実現しなかった。そして6月20日、遂に逃亡は決行され、翌21日、周知のごとき結末に終わった。このヴァレンヌ事件がレチフに与えた衝撃は決定的だった。それまで彼が抱いていた王への信頼、それによって実現を期待していた立憲政への信頼は激しく揺らぎ始める。レチフは、事件の顛末を様々な情報源から知り、それを記述しながら、「かくして、フランスにおいて王政が消滅したのは実にその日のことだったのである。」(*Les Nuits de Paris*, XVI, p. 308.) と書いた。

それでもレチフのルイ十六世に対する感情的なつながりは更に一年以上続くことになる。その間、レチフの筆にはルイに対する非難と赦しの言葉がためらうようにして交互に現れる。それはあれほどに期待した立憲君主政への抑えがたい未練にほかならない。実のところ、92年8月には廃位の要求がパリ代表から提出されるなど、この間の国王の地位は危ういものだった。実際この流れの中で続いて起こった二つの大事件、8月のチュイルリー宮襲撃事件と9月の囚人大虐殺事件は決定的な事態をもたらした。国王の権利は遂に停止され、家族ともどもタンブル塔へ幽閉され、裁判を受け、そして処刑されるというように、半年ほどの間にめまぐるしい展開をもたらすことになったのである。

レチフの国王への態度がはっきりと対立的になり、その思いを作品中に書き記すようになるのはこの頃からである。しかしその行文は単純な弾効などではない。それは革命の大義を遂に己のものとする事なく、反革命のシンボルと

して利用され翻弄された王への痛恨の思いと憐愍の情に彩られたものである。

こうしたレチフの思いを鮮明に示しているのは、『パリの夜』第三部「パリの二十夜」の第十七夜に見られる「ルイの弁護」という一文であろう。法廷での実際の弁護人マルゼルブらの弁護の至難さに思いを馳せながら、レチフは自分に問うてみる、ルイの罪とは一体なにか？彼は苦い思いで自答する。それは「思い違いと軽挙妄動の罪」であると。

ルイの罪は自分の真の利益を知らなかったことだ。自分が取るべき理にかなった方針は一つしかないこと、すなわち、国民の腕の中に飛び込み、全ての市民と同じく彼をも護ってくれる憲法への誠意と熱意を示すことで、取り巻きの無分別者や愚か者の間違った助言のせいであつたものを取り戻すべきだった、ということが分からなかった罪だ。(中略) ああ、ルイよ！国民の主力とあなたとは、心を同じくするほかはなかったのに、あなたはそれに気付かなかった。(Les Nuits de Paris, XVI, pp. 421-425.)

たとえルイが既に王権を剥奪されていたにせよ、従って、彼に下された断罪が形式的には一個人に対するものだったにせよ、ルイの処刑はやはり紛れもなく「王殺し」にほかならない。「王殺し」……このまさに「父親殺し」にほかならない事態に、レチフは心の底からの恐怖を味わった。もはや「二千四百万人の集結点」、国民の統合の要は失われたのである。

#### IV 共和主義へ、そして……

レチフがルイ十六世に仮託しながら、結局は自己の観念上の王にすがっていたにすぎないことは明らかである。しかし、己の長年温め続けてきた「改革案」、とりわけその集大成としての『アンドログラフ』を実現する者として想定していた、聡明で温情溢れる立憲君主という夢は、現実起こった王殺しによってあっけなく打ち砕かれた。もはや父／王はいない。もはや戻る道はない。

しかし、たとえ立憲君主政の理想は失われたとしても、レチフにとって、革命の目指す方向が彼の長年の信念の方向と一致しているかぎり、革命の大義は彼の大義である。重要なことは彼の「改革案」が優れた指導者によって実現されることである。この強い願望はレチフを急速に共和主義者へと変身させる。し

かし、立憲君主政に対して示した態度に比べ、共和主義者としてのレチフの態度にはある種の不透明さが付きまとう。

レチフが共和主義へと転向したのは、この1792年10月の段階だと見るのが妥当だろう。このことを明瞭に示すレチフの手紙が残されている。それは長年の知己、グリモ・ド・ラ・レニエール *Grimod de la Reynière* (1758–1838) に宛てた92年10月12日の日付をもつ手紙である。この手紙はグリモによるレチフ宛の26通の手紙に付す形で、『人生の劇』*Le Drame de la Vie* (1793) に採録されている。

グリモ・ド・ラ・レニエールは徴税請負人の息子だったが、革命以前は開明的で改革的な思想をもった才人としてレチフの親しい友人の一人だった。しかし、革命の進行とともに、それまで隠されていたその本来の傾向、すなわち特権の維持と旧体制の擁護と教権の支持という立場を露にし、その立場から、柔らかな言葉に包みながらも露骨な非難をレチフに対して浴びせるようになった。とりわけレチフが反論の手紙を書くきっかけとなった92年9月28日付けの最後の手紙(26番)は、レチフが『夜の週日』で示した反特権階級的、反貴族階級的、反教権主義的な姿勢を非難すると同時に、レチフが評価する人物たちをことごとく「過激派」だとして弾劾した上で、あなたも迷いの道から覚めて、早く自分たちの陣営に戻ってくるようにと説くものだった (*Le Drame de la Vie*, pp. 1324–1326)。レチフは、自分を弾劾する手紙をこうして印刷掲載した以上、世人がその内容を信じて自分のことも過激派だと誤解しないように (*Ibid.* p. 1327)、(予定の行動ではあろうが) 必要な反論をしておかねばならないと考えた。

そもそもレチフは、イデオロギー的な党派性を決して支持していなかったから、グリモが述べているような階級的利害の露骨な表現である卑小な党派性などはなおさら信じていなかった。彼にとって大切だったのは、どの勢力が自分の大切な改革案を実現してくれるかという点だけである。

レチフはグリモに対してまず、「チュイルリー宮襲撃事件」について述べる。前Ⅲ節でも触れたが、92年8月10日の「チュイルリー宮襲撃事件」は、ロベス

ピエールらの指導の下で、パリ民衆とフランス全土からの連盟兵がチュイルリー宮を攻撃し、国王の権利が停止するきっかけとなった事件である。レチフは事件を評価して、「8月10日の事件は宮廷によって惹き起こされたものです。宮廷は夜のうちに準備万端整え、恐れていた場末の労働者たちが来る前に、民衆に向けて発砲させたのです。卑劣な貴族たちが民衆を殺すことしか考えていなかったのはまったく本当のことです。彼らは用事に出かける女たちに向けて回廊から発砲したのです。」と述べた上で、グリモの変節にこう注意を促す。「この腐敗した貴族階級、ずっと前からあなた自身が軽蔑してきたこの貴族階級に対して激しい怒りが爆発したとて、なんの驚くことがあるでしょうか。」(Ibid. p. 1328)そして、結局人は自分の所属する階級の価値観でしかものを見ないものであって、それがまさしく国王を破滅させた原因であり、またあなたが私に対してぶつける逆説や非難の原因なのだ (Ibid. p. 1329)、とグリモの階級的偏向をたしなめる。

レチフが強調するのは、自分は決して信条を変えたことはない、ということである。「どうか私が変わったなどと思わないでください。変わったのは(略)私の知り合いの貴族たちなのです。あなたもその方たちも、あの頃は私と同じ考えを持っていました。」(Ibid. p. 1330)レチフにとって意味のあることは、権力争いの中でどのグループにつくか、というような党派的問題ではなかった。自分はどのような不利益にも耐えて右の誘いも左の誘いも断ってきたとして、レチフが掲げるのは愛国的な立場である。「私は愛国者です。(略)私は常に、無秩序と暴虐と圧政に敵対する全ての人々とともに愛国者でした。あなたはいつたいなぜ今日になってこの私に、変われ、などと要求するのでしょうか。」(Ibid. p. 1331)

このレトリックにもかかわらず、立憲君主政という温和な改革の夢が潰えた以上、自分のプランに沿った望ましい改革が実現されるには、指導者が誰であれ、現に権力を掌握している共和主義者を当てにするほかはない、とレチフが考えたのは確かだろう。「私はダントン、パッシュ、ティリヨを讃えます。愛国の情と不変の行動によって際立つ全ての人々を讃えます。」(Ibid. p. 1330)共和

主義の指導者たちに賛意を表してこう述べるレチフにとって、実はこれ以外の現実的な選択肢はなかったのである。

見方によっては、変転して留まるところを知らない革命も、このように、そのある段階においてはレチフの信条と幸福にも重なり合うことがあったと言いうるだろう。もちろんこうした蜜月は、党派と指導者が激しく入れ替わる激動の中で長く続くはずもない。現れては消える政治的指導者へのレチフの評価は概ね厳しい。なによりもレチフにとって容認できないことは、右派にしる左派にしる、指導者たちが党派的権力争いだけを自己目的化して、国民の幸福を実現する努力を蔑ろにしていることだった。つまり、彼の改革案、とりわけ『アンドログラフ』に眼を向けてくれる、真に愛国的で共和主義的で高潔な指導者が現れないことだった。

こうした状況の中で、93年以降強まるロベスピエールへのある種の留保付きの支持は、レチフの複雑な権力者観を示すものである。

実のところ、この時期までレチフが信頼を寄せていたのはジロンド派だった。しかし93年5月末から6月初めにかけて起こったジロンド派の肅正は彼の考えを一変させた。レチフはそもそも、ジロンド派の穏健路線と法治主義に革命の行く末に対する希望を抱いていたのだが、これをいわば弱腰による反愛国的利敵行為と考えを変えるようになった節がある。これについてレチフは『パリの夜』第三部の「番外の夜、第3夜」でこう書いている。「以上が5月31日に始まった動きだった。ペティヨン、ガデ、ラスルス、プリソ、ランジュイネ、ヴェルニヨ、ビュブたちが告発されたのだ！真の愛国者、自由のもっとも堅固な支えと信じていた彼らがである、,,、彼らは我々を騙していたのだ。その後の彼らの行動が裏切りを証明している。彼らは我らの母の胸を引き裂こうとしたのだ。」(Les Nuits de Paris, XVI, pp. 520-521) レチフのこの判断が正しかったかどうかを俄に判定することはできない。穏健な姿勢を弱腰と受け取り、バランスを取った外交を売国の行為と断ずるのは、歴史の激動の間近にいる者にとって避けられない短絡かもしれないからである。またこの時期ほど、レチフのような権力とは縁のない文筆家にとって、政治の非情に巻き込まれないよう注意しつつ、

ながしかの発言を続けていくことが困難だった時期はないだろう。

どうやジロンド派に失望したらしいレチフは、俄に山岳派に共感を抱いたかのように受け取れる次のような一節も残している。「もし十二人委員会が勝っていたら、我々はいったいどんな禍に曝されたことか！そう考えると身の毛がよだつ！おそらく共和国は今頃、引き裂かれ、ばらばらにされ、周囲の暴君どもの餌食になっていたことだろう！だから、我々の損害を予見した山岳派を祝福しようではないか！そして既に被った損害を修復するよう努めようではないか。」(Ibid. p. 522)

確かに、レチフはジャコバン派に、というより山岳派に直接与したこともないし、この時期までは表立ってロベスピエールを賛美したこともない。それどころか、「私がいつも見、考え、言い、書いてきたことだが、教育のない下層民というものは、どんな政府にとっても最大の敵なのだ。あの煽動者が同じ服装をして語りかけるのは、そうした下層民、つまりあの愚民たちなのである。」(Les Nuits de Paris, XVI, p. 460)、と暗に名指しながらサンキュロットの煽動者(ロベスピエール?)を非難している。

サンキュロットの煽動者と山岳派に対するこの二つの矛盾した評価は、これらがまったく異なる政治状況の下で書かれたものだとすることを考慮すれば了解できる。後者は「パリの二十夜」の「第二十夜」、すなわちジロンド派時代のものであり、前者は後に追加された「番外の夜」第3夜、すなわち恐怖政治が確立した時期のものである。ここには、危険な政治状況における身の処し方としての韜晦を見ることが妥当かもしれない。

しかし、レチフのこの豹変には、それだけではすまないもの、見過ごしにできないものがある。それは、レチフにはなにかしらロベスピエールのものがある、という点である。もちろんレチフは声高にロベスピエールを賛美したことはないが、ロベスピエールが体现していた何かに対して複雑な思いを抱いていたらしい兆候はある。もちろん、ロベスピエールを、彼が行った歴史的な事実以外の要素によって評価するには、現在でもなお材料が足りないという判断は正しいだろう。従って、レチフのロベスピエールに対する評価を正確に測定

する条件は整っていないとするのも正しいだろう。それでもこの両者を比較してみたいという欲望はなかなか誘惑的である。ここでは、簡略に、レチフがロベスピエールを断罪すると同時に評価するという複雑な思いを抱いていたらしい、という点だけを明らかにしておきたい。

そもそもレチフはロベスピエールを憎んでいたはずである。なによりも下層民の扇動者、ロベスピエールは、秩序主義者レチフにとって決して容認できない存在だった。またロベスピエールの権力の特徴の一つだった清廉主義は、レチフがずっと以前から憎んできた宗教的清廉主義と同様、人間の幸福の障害物だとレチフは考えていた。

しかしレチフはこれとは別の感想も残している。例えば、91年に中断しこの95年7月に執筆を再開した<sup>9)</sup>『私の政治学』<sup>10)</sup>第53節「震えよ、ロベスピエール、お前の番が来た！」では、テルミドールのクーデタで逮捕されたロベスピエールの裁判の時の様子をこう描いている。「彼は、自分が他者を扱ったのと同じ扱いを受けた。法の外に置かれたのである。私は彼がパレ・ド・ジュスティスの大ホールを担架に乗せられて通るのを見た。肉体と精神の苦痛にうちひしがれたその姿は、誰の同情をも惹かなかった、この私以外には。ギロチン刑を受けた者の誰もこれほど哀れではなかった。彼はその百人分以上苦しんでいた。」(*Monsieur Nicolas*, VI, 339-340) この一見感傷的な感想は、他の場所であれほど糾弾した人物へのレチフの言葉としては、同情の念が強すぎるようである。さらに第55節「ロベスピエール後継者たちの盲目」では、テルミドール後の反動政府の無能を糾弾しつつ、ロベスピエールを擁護するかのごとき感想を述べる。「新しい政府が動き始めた。前政府と同じように盲目的だ。禍を修復する方法を一つしか知らない。前指導者たちの正反対を行うことである。しかしロベスピエールとその共謀者たちが行ったこと全てが悪かったわけではないのである。」(*Ibid*, VI, p. 340) 他の場所ではあれほどにロベスピエールを糾弾したレチフのこの同情的な物言いは尋常ではない。

こうした一抹の共感と同情がもっと政治的な文脈で語られる箇所が、第57節「新憲法」に見られる。歴史的事項への厳密な言及はないが、これはどうやら

「共和国三年憲法」に触れたものらしい。というのも、この文が、王党派勢力回復の跳躍台となった95年10月3日の「ヴァンデミエールの乱」に言及しているからである。

ここで指摘しておくが、パンテオン地区の集まりで、ある市民が憲法の廃棄と共産主義体制の設立を要求している姿が見られた。しかし、初めは話し方があまりに下手で、私自身も彼の意見に反対だった。(略)聴衆は彼を殴ろうとした。それほど貴族階級がすでに力を持っていたのである。(略)後で分かったことだが、この人物はロベスピエールの秘書だった人物である。どうやらロベスピエールも同様の計画を持っていたらしいと私たちは推測した。その点について私はじき疑いを持たなくなった……しかし、これ以上私の考えを説明するのはやめよう。(Ibid, VI, pp. 342-343)

これだけのことからなにか大きな結論を引き出すことはできないが、レチフの複雑な心中を窺い知ることはできよう。ましてや、翌96年5月には、バブーフたちの「平等派の陰謀」事件が起こっているのである。レチフの口調の重さにもながしかの理由があると推測してもおかしくはない。レチフは、自分の改革案の実現者を求めて、立憲君主、ジロンド派、山岳派と虚しく期待と幻滅を繰り返した挙句、この時期にはひょっとしてバブーフたちの「危険な」グループに情動的に近づいていたのかもしれない。しかしバブーフとその仲間は非業の刑死を遂げた。そして『私の政治学』は、単なる偶然か故意かは分らないが、「共産主義」に論及しながら、遂にバブーフという名には一言も触れないのである。シルヴァン・マレシャル (Sylvain Maréchal) という共通の友人を持ちながら……

(1997年10月29日稿)

## 注

- 1) 『フランス革命の心性』ミシェル・ヴォヴェル、立川孝一他訳、岩波書店、1992年。
- 2) レチフ作品の引用は以下、特に断らない限り、次の版による。  
*Nicolas-Edme Restif de la Bretonne, Œuvres Complètes, 207 volumes, Réimpression des éditions de Paris-Genève, etc., 1767-1889. Slatkine Reprints, 1988, Genève.*
- 3) 「宇宙は無限に蘇る——レチフの自然学」、鹿児島大学教養部「文科報告」第28号第3

分冊, 1993年9月, pp. 101-119, 参照。

- 4) 例えば, *Ned Rival, Rétif de la Bretonne ou les amours perverses, Librairie Académique Perrin, Paris, 1982, chap. XII.*
- 5) 前掲論文「宇宙は無限に蘇る——レチフの自然学」参照。および筆者の編訳に係る『当世女』の「解説」Ⅱ-2「女性と生殖的宇宙観」参照, 筑摩書房, 1990年。
- 6) 大作『パリの夜』*Les Nuits de Paris* は, 革命が勃発するまでのパリの夜を描いた「第一部」, それを継続する形で, 革命が勃発する数日前から革命の初期の数カ月の生々しい出来事を描いた第二部「夜の週日」, そして第三部「パリの二十夜 (付番外の夜)」で構成されている。
- 7) *David Coward, The philosophy of Restif de la Bretonne, University of Oxford, 1991, pp. 718-721.*
- 8) *Le Drame de la vie* には, 第5の手紙の後ろ半分と第6~26まで, およびレチフの返信が掲載されている。
- 9) プレイヤット版『ムッシュー・ニコラ』年譜に拠る。*Monsieur Nicolas, 2 vols, Collection de la Pléiade, Gallimard, 1989.*
- 10) *Ma Politique, Monsieur Nicolas, tome VI, Jean-Jacques Paurert, 1959.*